



馬耳東風

「おタケさん！」と呼びかけると、すぐに「おタケさん！」とかえってくる。面白いので「わはは！」と笑うと、「わはは！」とかえってくる。「オウム返し」とはよく言ったものだ。そのうち、覚えている言葉を勝手にしゃべりだす。電話のベル音など得意なものだ。善悪の判断なしに記憶を再生する。オウムやインコはオウム科で暖・熱帯に分布するが、九官鳥はムクドリ科で東南アジアに分布する。九官鳥の声は喉を動かして声も大きく、人間の声によく似ている。人の言葉や他の鳥の鳴きまねがうまく、江戸時代から飼い鳥として輸入された。歌舞伎の主役が派手なしぐさや台詞で引っ込んだあとで、三枚目役がそっくりまねをして笑わせる演出もオウム返しだ。先の「おタケさん！」がよく出てくるのは、江戸時代にシーボルトが日本地図を持ちだした罪、いわゆるシーボルト事件で入国禁止となり、日本人妻の“お滝さん”を思い出して言葉を教えている内に“き”が“け”になり、今の表現をするようになったという。これが元でヨーロッパの鳥でも「おタケさん！」としゃべるのだそうだ。しかし、最近のしゃべりだと「ホーホケキョ！」「ポッポッポ！」や「おはよう！」「こんにちは！」「バイバイ！」「ごはんだよ！」がどうも多いようだ。しゃべり続けの最後に「頑張ってるね！」の激励で家族同様に送り出されると、一日の仕事も楽しくなるというものだ。ところで、外国では逃亡したのが下品な言葉でしゃべるので、地域で悩まされている例があると聞く。野生

だと繁殖期に相手の存在と位置を知るのに騒がしく本来の声でラウド・コールする。これが単独飼育で人とのラウド・コールの繰り返して言葉を覚えるという。人の外国語の発音教育で反復して発声訓練をして学習効果をあげるのと同じだ。かつて、東南アジアの政治家から友好の印に頂いた九官鳥を国内動物園で飼育していたが、しっかり日本語をしゃべっていたのを思い出す。また逃亡した迷子のインコが、保護先の警察署で深夜に突然住所を番地までしゃべりだし、3日ぶりに無事帰宅したのがニュースになった。その記憶力に驚くとともに、教え込んだ飼い主の根気強さに敬意を表したい。動物好きの作家・遠藤周作は、入院中も九官鳥をベランダで飼って会話を楽しみ、身代りもしてくれたと書いている。最近、犬猫が人の擬音をしゃべると教えられた。「ごはん」だ。屋内で人と動物の密着した生活の一体化がうかがわれる。

さて、緊急地震速報のチャイム音製作者として知られる福祉工学の伊福部達・東大名誉教授は、九官鳥の声が人間とよく似ていることに着目し、気管分岐部に鳴管が2つあり「抑揚」と「音の高さピッチのゆらぎ」が人間と波形は違いながらも、人間の耳にはしゃべっているように聞こえ、脳が同じ音声として処理していることを突き止めた。またインコの発声研究から、口を開けたまま破裂音を出す腹話術の謎が解明された。今や「イントネーションの出せる人工喉頭」の恩恵に浴している。まさに動物に学ぶ技術である。餌のいらぬいぬいぐるみのオウム返しの出現は、いかにも電子時代の産物だ。

(柏)